群馬イノベーションアワード協賛社　トップ座談会 5

わが社の成長戦略

冬木工業の大竹良明社長ら８人が「わが社の成長戦略」をテーマに、意識改革や女性活躍について意見を交わした。

GUNMA INNOVATION AWARD 2019

活発に意見交換した（左から）松本さん、宮﨑さん、大熊さん、大竹さん、中川原さん、大本さん、小林さん、江黒さん＝上毛新聞社

出席者

冬木工業	大竹良明社長
オルビス	大熊章之社長
クスリのマルエ	江黒太郎社長
グルメフレッシュ・フーズ	松本健社長
セントラルサービス	大本寛社長
中川原呉服店	中川原勝洋氏
花助	小林新一社長
HAWORD	宮﨑雄一社長

女性活躍

意識改革

業界イメージ刷新

行動見直し改革を　大竹

おおたけ・よしあき　1960年、安中市生まれ。大学卒業後、約19年間の銀行勤務を経て、2003年に総合建設の冬木工業に入社。08年から現職。新潟県の北陸製作所社長も兼務。県鐵構業協同組合理事長、全国鐵構工業協会理事

大竹　ビルや工場などの総合建築と、建物の柱や梁の鉄骨製造を手掛けている。東京オリンピック・パラリンピック後の秋以降、大型物件が控えている。派手な大胆な改革だけが成長ではなく、行動を見直すだけでも改革できることもある。地道に丁寧な仕事を続けることで、信用を積み上げることができる。

社員には、些細なことにも気付き、対応できるよう考えて行動する習慣づくりの大切さを伝え続けている。社員がやりがいや達成感を持たないと、真の顧客満足は得られない。「夢プロジェクト」という、社員が自由な発想で未来を語り合うことを始めている。私が入社した時より売り上げ、利益は上がっているが、それ以上に社内の雰囲気が良い方向に変わってきていることがうれしい。古い会社の体質が変わってきた。

大熊　食肉卸を専門に、生鮮食品や総菜などの調理加工品を取り扱っている。自然相手に食材を供給し、生かされている企業。肉屋の「汚い」「臭い」「気持ち悪い」を改善するため、いち早く衛生管理に力を入れた。来年は、食品衛生管理の国際基準「ＨＡＣＣＰ（ハサップ）」の義務化に向けた法律が施行され、一層の衛生管理が求められる。人の口に入る命に関わるものを扱っている。食中毒という目に見えないものとの闘いの中で、しっかりと段取りをしてヒューマンエラーが出ないような対策を講じている。

松本　主に豚を原料にホルモンやもつ煮などの食品加工を外食チェーンに卸している。現在、豚コレラの問題もあるが、これまで大打撃となることなく、会社を設立して21年目を迎えた。それでも、リスク低減を図ることが持続的経営、成長に

衛生管理対策に力　大熊

おおくま・のりゆき　1961年、旧榛名町（現高崎市）生まれ。食肉学校卒。81年に食肉加工業の大一ミート入社。2000年に同社長に就任。鳥一フーズと合併、オルビスに社名変更し、09年から現職

は必要だと考えている。社員が路頭に迷わないようにすることも経営者の務めだ。既存の工場だけでは商品の生産が追い付かないため、新たな工場を造り、新商品の開発や生産体制を構築して新規顧客の獲得を目指している。

大本　人材派遣や業務請負、職業紹介を行っている。行政受託の再就職支援や障害者雇用に向けた活動もしている。企業主導型保育事業も展開し、当社の女性社員や地域にも提供している。2015年の改正労働者派遣法により、派遣事業の適正化で全国に8万5千あった事業所数は、6万にまで減った。さらに、来年4月からは、正規と非正規雇用労働者の不合理な待遇差の解消を目指した「同一労働同一賃金」の規定を盛り込んだ改正法が施行される。法令順守しながら、地域人材ビジネス会社として信頼を得てシェア拡大を目指す。そのためには、法律を理解するための社員教育が成長運営の鍵になる。

地域連携した経営　江黒

えぐろ・たろう　1976年、旧大胡町（現前橋市）生まれ。国内の大学を卒業後、米国で経営学修士取得。国内大手製薬会社で営業、海外事業、マーケティングを経験し、2010年にクスリのマルエに入社。16年から現職

江黒　ドラッグストアと調剤薬局をメインに展開し、地域一体企業を目指している。多くの大企業のドラッグストアが群馬県に入ってきており、本県発祥は当社くらい。他のドラッグストアの売り上げは食品が多くを占めているが、当社は薬と化粧品を主に、1店舗当たり平均2万点のアイテムをそろえ、58ある店舗が美と健康を提供している。マルエがあるから生活が成り立っているというくらいの地域インフラになりたい。地域が成長していかないと、会社も成長しない。地域との密着を深め、地域とともに成長することが一番の使命だと考え、社内の意識統一を図っている。

宮﨑　前橋市内で2店舗のイタリアレストランを経営する。すべての人を幸せにする「ハピネス」を経営理念に掲げている。会社自体の性格が良ければ人が集まり、会社が強くなる。社員が仕事を成し遂げた喜びによって幸せになってもらうことで、お客さんや周りの協力者をも幸せにすることができると信じている。来店する一人一人のお客さんを大切にし、目の前のことをしっかり取り組むことが成長につながると考えている。

多様な人材強みに　松本

まつもと・たけし　1971年、前橋市生まれ。大学卒業後、98年にグルメフレッシュ・フーズを設立、社長に就任。食品製造業を展開し、「安心とおいしさをまごころこめて」を理念に、食の安全の高度化に取り組んでいる

小林　店舗で花を売るのではなく、ウェブなどで注文を受け、提携する全国170店舗の花屋の中から最適な花を届ける「フラワーコンシェルジュ」をしている。母の日やお盆、クリスマスやバレンタインなどＣｔｏＣ（個人間取引）をターゲットにした既存のフラワーネットワークとの差別化を図るため、ＢｔｏＢ（企業間取引）とＣｔｏＢ（個人対企業取引）に特化して、お客さんが何を求めているかを見極め、新しいサービスや商品を提供している。

信頼でシェア拡大　大本

おおもと・ひろし　1977年、水戸市生まれ。99年セントラルサービス入社。入社後2年間、請負スタッフとして製造現場に従事。その後、複数の営業所責任者を経て、2015年から現職

中川原　創業114年の老舗呉服店を家族で営んでいる。じっくり選んだものを仕入れて適正な価格で売る。展示販売会は今年で30回目を迎えた。着物を売るだけで、相談を受けていない店は多い。センスが細分化し、着こなしや着る場面など提案することが求められている。最近、浴衣はコスプレのようになってきている。それでも着るきっかけになれば良いと思う。これからは、高いものが良いではなく、若い人も着られる価格帯や感性にあった着物作りも必要だと感じる。かといって安いだけでは、レンタルと変わらなくなってしまう。着物への理解が深まる場を設けることが必要だ。

江黒　従業員の8割は女性。子育てしながらの労働時間の長さや、女性店長が数人とハードルが高いなどの状況もあるが、女性が働きやすい環境を整えている。育児休業明けの時短勤務できる期間は、子どもが3歳までだったが、今年4月から小学校卒業までに延ばした。専門性、利便性を追求し、地域と連携した美と健康の専門店を目指し、持続可能な経営を心掛けている。

相談提案できる店　中川原

なかがわら・かつひろ　1972年、前橋市生まれ。大学卒業後、茨城県の呉服店勤務を経て、1905年創業の中川原呉服店に入り、現在に至る。年1回開催する創業祭展示販売会「年輪祭」は30回を数える

大竹　溶接関連業界でも女性に活躍してもらおうと、全国組織の3団体で構成する「女性活躍ワーキンググループ」の委員長を務め、ＰＲ動画の作成などを進めている。男社会だという意識を覆すようなことを始めている。

大熊　第一線の営業活動に女性を入れて業界を活性化し、新たなイメージをつけることにも力を入れている。生鮮食品業界の世界が変わってくれればと思う。

実行委員長を務め、今年9月に高崎市で行った「群馬お肉の祭典」には過去最多の約5万4千人（昨年約3万2千人）が訪れ、予想を大幅に上回った。地域が盛り上がればと思って作った「高崎ほるもん」なども少しずつ知名度が上がり、食品業界そして地域活性につながると良い。

松本　食肉業界は人手不足の問題がある。外国人留学生や実習生を採用しているが、文化や品質に対する意識が違う。良い商品を作るための気持ちの統一が課題であり、克服するシステムづくりが急務になっている。今後、中小企業こそＩｏＴ（モノのインターネット）や自動翻訳などの最新技術を取り入れることが必要だと考えている。外国人やＬＧＢＴ（性的少数者）など多種多様な人たちが働きやすい労働環境を整備し、強みに変える。業界を変える気持ちで、多様な人材が活躍できる場を広げることが成長につながる。

大本　今後の人材不足社会で打つ手としては、シルバー、主婦、外国人の各人材の活用と生産性向上が必要不可欠になる。そのような人材が活躍できる場をつくり出す努力をし続けることと、新たな枠組みとして事業構造改革や成長事業への集中と選択を行うことで、真のお客さまの課題解決に貢献していければと考えている。

宮﨑　ありがたいことに当社には人材が来てくれる。選んでいるわけではなく、働いていると美人になる。従業員に対して甘い部分もあるので、接客に対する意識などをしっかりと伝え、さらに満足してもらえる店づくりを進めていこうと考えている。今年から販売を開始したオリジナルドレッシングは、群馬のおいしい野菜の素材の味を邪魔せず楽しむことができる。売れ行きが好調で、生産を増やすために新たに工場を造る予定だ。多くの人に味わってもらえるよう、今後、自動販売機での販売展開を進めたい。

小林　さまざまな情報を先回りすることで、仕事につながると感じている。私が動画投稿サイトでアイドルの曲を歌いながら、全国各地で行われる握手会場の告知を行ったところ、口コミで広がり、ファンから花を贈りたいと、多い時で100件の注文が入ったことがある。海外のアパレルメーカーやデパートなどのオープンを動画で告知したことで、開店祝いの花の依頼を受けたこともある。今後は、1年の3分の1を生活しているアメリカでもビジネスの展開ができるよう模索している。

中川原　即位礼正殿の儀で、天皇陛下が召されていた衣装の色は熟練の技術でも同じように出せず、技術を伝えることは難しくなってきている。化学繊維の着物が増え、職人による手仕事の染め物は少なくなってきている。着物文化を絶やさないように「継続は力なり」で、産地や職人の思いを届け、専門店としての役割を果たしていきたい。

既存網との差別化　小林

こばやし・しんいち　1972年、前橋市生まれ。米国、オランダに留学して花作りを学び、帰国後に花き農家などを経験。2005年に生花店開業。独自に構築した生花店ネットワークで花を届けている

すべての人幸せに　宮﨑

みやざき・ゆういち　1972年、熊本市生まれ。2001年に群馬県に移り住み、イタリア料理を学ぶ。13年にイタリアレストラン「ピッツェリア・ペスカ」をオープン。前橋市で2店舗を展開する

座談会の６回目（最終回）は29日に掲載予定

ファイナルステージ　12月７日（土）　ヤマダグリーンドーム前橋　12：00開場　14：00開幕　入場無料